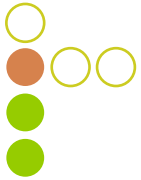
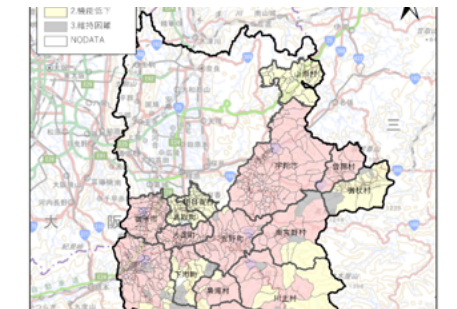


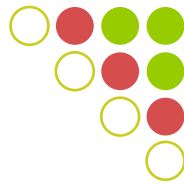
# 奈良女子大学 大和・紀伊半島学研究所 なら学研究センター



Center for Nara Studies  
Institute for YAMATO and Kii Peninsula Studies  
Nara Women's University



要覧  
2022 年度版



## なら学研究センターの目標・沿革

なら学研究センターの前身は、文学部なら学プロジェクトです。奈良女子大学文学部なら学プロジェクトとは、  
「歴史を有した地域である奈良の社会や文化の特性を現代的視点から読み解き、その成果を外部に発信する新しい試み」と定義され、2004年、文学部国際社会文化学科(現在の人文社会学科)を推進母体として始められました。それまでにも、奈良女子大学には、文学部に留まらず、奈良を対象とした研究や教育の長い積み重ねがあります。なら学プロジェクトは、こうした本学が立地する奈良の研究と教育、そして地域社会の課題解決に、歴史学、地理学、考古学、社会学、文化人類学、民俗学、美術史、文学、さらに生活環境学部、理学部、社会連携センターなどの協力のもと、様々なアプローチから取り組んでいく新しい「大学的地域学」の試みでした。

なら学プロジェクトは、「なら学」(講義)、「なら学演習」、「なら学フィールドワーク実習」といった「なら学」を冠した学際的授業を次々と新設しました。これらは学内の多くの教員が協力して20年近く継続し、今に至っています。全学の学生が受講しますが、授業の目的は、「学生たちに奈良を好きになってほしい」、「奈良を入口に各種の学問アプローチを感じてほしい」というものでしたが、この授業をきっかけに奈良の様々な地域活動に参加する者や、卒業研究に奈良を選ぶ学生も増えてきました。こうした成果の一部を奈良の方々に還元する「奈良女子大生による奈良に関する研究発表会」も、プロジェクト開始当初から毎年三月、奈良町のお寺や県立美術館などを借りて公開実施しています。

## なら学研究センターの新設

こうした20年ほどの活動が学内でも認められ、なら学研究センターが新設されました。なら学研究センターは、共生科学センター、古代学・聖地学研究センターとともに、新設された大和・紀伊半島学研究所の一センターとなりました。それにともない、文学部のなら学プロジェクトは学生教育を中心としたプロジェクトへと役割を特化しました。全学的に奈良を研究する組織として、なら学研究センターが動き出しました。

なら学研究センターは、上記の「なら学」系の授業を、文学部なら学プロジェクトとともに支援する他に、以下の二つの柱を有しています。

まず第一は、現代奈良が抱える社会課題の解決に関わることです。奈良県は全国でも有数の人口減少地区を抱えています。少子高齢化、地域産業の活性化など課題先進県であります。県内の自治体や社会福祉協議会などから、人口推計、地域課題の抽出、地域づくりのアドバイスなど多くの依頼が寄せられ、それらを受託研究、共同研究のかたちで実施しています。国際情勢をみると、これからはエネルギーや食料の自給が日本の切実な課題となってくるでしょう。近未来の日本、それはかつての大和のように深い文化風土に根ざした分散型の社会でしょう。そのモデルをここから見いだしていきたいと考えています。

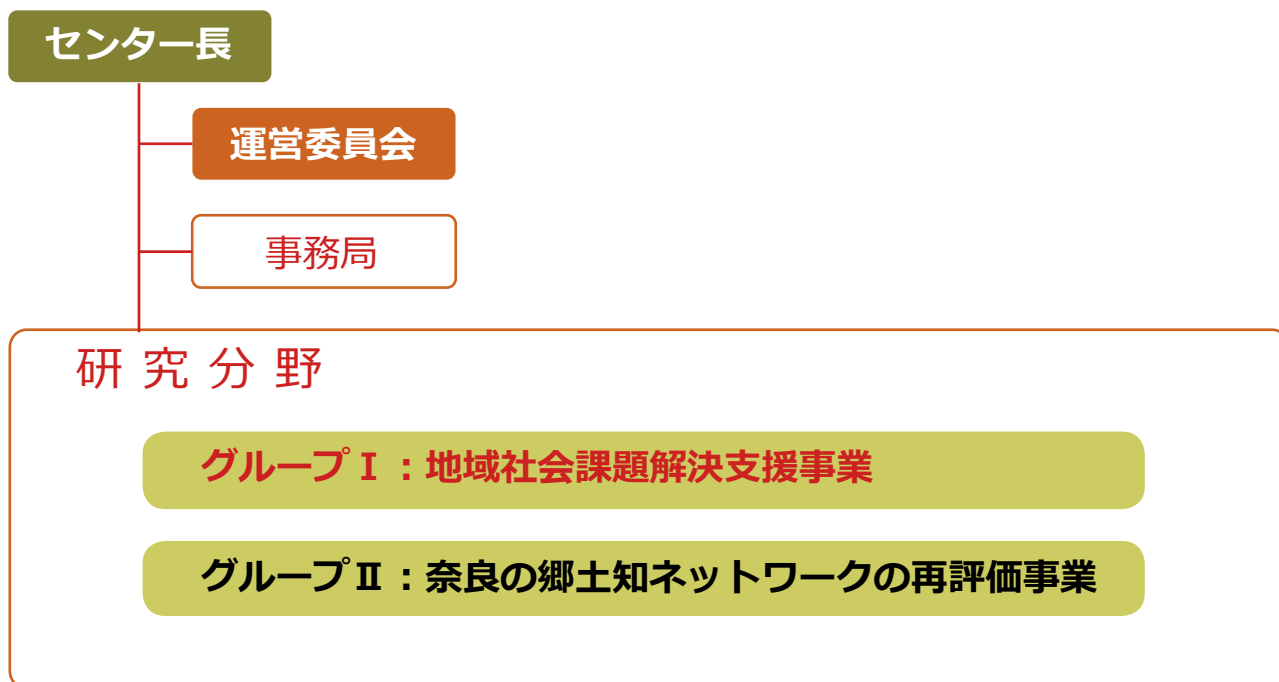
次に第二の柱は、奈良・大和の知のネットワークを探り、奈良の文化を支えてきた文化メディエーターに光を当てることです。文学部なら学プロジェクト時代からおこなわれてきた「なら学研究会」を引き継ぎ、奈良研究を学内外の人々と深め、発信する活動を継続しています。詳しくは後述しますが、2022年度までに30回以上の研究会を重ねています。

また、なら学研究センター自らも、そうした文化メディエーターの役割を担おうとしています。2021年度だけでも二カ所から奈良の郷土史料が持ち込まれ、その整理やデジタル化のサポート作業を実施しました。これについても後述しますが、こうした作業は、奈良県内の地域への調査や研究を通じた社会貢献でもあり、またそれらによって明らかになった研究成果を、センターの紀要『なら学研究報告』や、なら学研究会で一般公開しています。



下北山村

# なら学研究センターの組織



## 各グループのメンバー構成

### グループⅠ：地域社会課題解決支援事業

石崎 研二	高田 将志	寺岡 伸悟	
西村 雄一郎	林 拓也	水垣 源太郎	
吉田 容子	浅田 晴久	室崎 千重	青木 美紗

### グループⅡ：奈良の郷土知ネットワークの再評価事業

磯部 敦	内田 忠賢	小川 伸彦	
西村 さとみ	宮路 淳子	武藤 康弘	
矢島 洋一	佐藤 宏明	田中 希生	

### 協力研究員

岩坂 七雄	岡島 永昌	樽井 由紀
長島 洋介	松田 度	村上 育子
山上 豊		



県や市町村、社会福祉協議会等の公共団体と共同研究を行い、人口減少下の地域コミュニティの持続可能性を実践的に追求しています。

# グループ I

## 地域課題社会解決支援事業

### 奈良県移住政策の評価

2018（令和元）年度に行った奈良女子大学・奈良県共同研究「奈良県南部におけるコミュニティ開発の拠点形成と人材蓄積過程」では、奈良県が県南部振興計画の



Fig.1 オフィスカンプ東吉野

一環として南部中山間地域に設置した移住促進施設、オフィスカンプ東吉野の機能評価を行いました。

まず、本施設の訪問者・イベント記録に基づいてネットワーク・データを再現し、それらのレイヤー構造や時系列的变化を分析することにより、移住促進施設がもたらす定住



Fig.2 施設運営者の坂本大祐氏

人口・関係人口・交流人口の創出効果、移住者へのファシリテータ効果や施設運営者の活動の展開過程を評価しました。また東吉野村に在住する満15歳以上の男女を対象として、当地の生活課題や移住に関わるアンケート調査も実施しました。

その結果、施設への実訪問者は奈良県外の出身者が大半を占めており、施設は関係人口・交流人口の創出に重要な役割を果たしていることがわかりました。また外部支援者

も含めた社会ネットワークの重層性とその豊かなつながりが移住者を地域に引き込み定着させてい

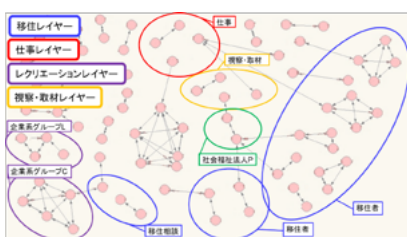


Fig.3 移住促進施設をめぐるソーシャル・ネットワーク

ることも計量的に明らかになりました。施設は「移住促進機能」から「移住定着機能」へと機能を変化させており、これが移住者の定着に役立っています。そこでこうした施設のフェーズの変化を発見するための「拠点機能指数」を開発しました。

施設が位置する東吉野村は、近畿2府5県の市町村の中で住民の平均所得がほぼ最下位であるにもかかわらず、2017年から2018年にかけて転入率が

転出率を超過しました。この上昇には、開設から2018年にかけて施設が果たしてきた移住促進機能が貢献したと考えられます。

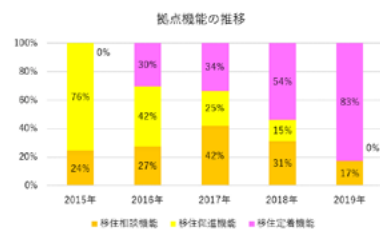


Fig.4 移住促進施設の拠点機能の推移

### 持続可能性集落の要因分析

2019（令和2）年度の奈良女子大学・奈良県共同研究「奈良県南部東部地域の集落構造分析と社会地図化」では、総務省・国土交通省「過疎地域等の条件不利地域における集落の状況に関する調査」のうち奈良県下19市町村736集落のデータの再分析を行いました。

奈良県は、全国や近畿圏の過疎地域と比べて少子高齢化が進んでおり、「10年以内に消滅」および「いずれ消滅」とする「消滅可能性集落」の割合が高い一方で、転入者とくに子有世帯の転入があった集落の割合も全国

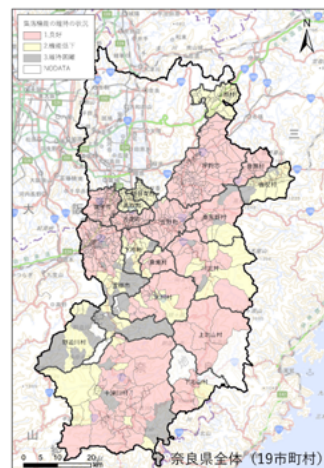


Fig.5 集落機能の維持状況



および近畿圏と比較して高くなっています。「消滅可能性集落」がある市町村では、中心部への移手段を自治体の輸送サービスに依存する度合いが全国および近畿圏と比較して高く、空き家を十分管理できていない集落も全国および近畿圏と比較して高い割合となっています。

集落機能の維持可能性を被説明変数とする重回帰分析を行ったところ、病院・診療所、飲食店・喫茶店といった中心地機能のあることがプラスに働き、市町村役場・支所、公民館・集会所があること、転入者があることがマイナスに働くという、気になる結果も分かりました。さらに、住民の生活の質の維持に向けた取組は交通輸送支援や高齢者支援が主であること、配食サービスが少ないことなどの課題も明らかとなりました。

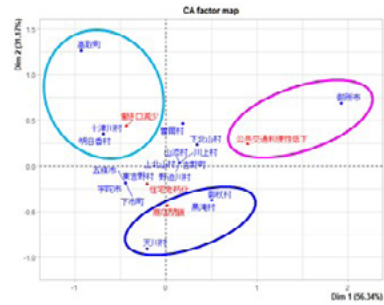


Fig.6 住民生活基盤に関する19市町村の類型化

### 10年後を見ずえたコミュニティ・アクション

2021（令和3）年度から2022（令和4）年度にかけて、奈良女子大学・高取町社会福祉協議会共同研究「高取町におけるコミュニティ主導の支えあいネットワーク構築」「地域住民のサポート・ネットワーク構築に向けたコミュニティ・リサーチ」を実施しました。

高取町は大阪都市雇用圏に属し、隣接する橿原市の商圏にも属していますが、全町が過疎地域に指定されるなど急速に「衰退」しているところ



Fig.7 高取町でのワークショップのライド

そこで高取町3地区の住民及び他出した地区出身者を対象に質問紙調査を行い、地域住民のニーズの掘り起こしと課題の「見える化」を行うとともに、ワークショップを通じてその成果を共有し、コミュニティ主導の支え合い活動へ発展させることを目指しました。

高取町3地区はいずれも比較的近くに医療機関があるものの買い物先が離れています。車が運転できる間はよいのですが、車が運転できなくなると買い物や医療アクセスが困難になるため、多くの住民が不安を感じています。これらの地区の出身者は結婚のタイミングで他出しますが、その約7割は県内に居住し、

比較的頻繁に帰省しています。そのため地区の高齢者住民にとって緊急時は安心なのですが、子どもたちが実家に帰郷することはないので、将来を考えると不安が募ります。



Fig.8 高取町でのワークショップの様子

そこで5回にわたって地域住民とのワークショップを実施し、軽スポーツによる多世代交流と地区間交流、買い物支援、ゴミ出し支援の仕組みづくりについて検討しました。

### 移住者の再転出を防ぐ

同じく2021（令和3）年度から2022（令和4）年度にかけて、奈良女子大学・下北山村共同研究「下北山村における「関係人口」の創出・定着要因に関する社会人口調査」「下北山村におけるソーシャル・サポート・ネットワーク構築に向けたコミュニティ・リサーチ」を実施しました。

下北山村は奈良県の南東端にある過疎山村で、教育、買い物、仕事の面では奈良県内よりも三重県熊野市とのつながりが深い地域です。下北山村では、高校進学の時点を若者が村を離れてしまいます。その一方で大都市への進学・就職後の帰村者や移住者、移住希望者も増えています。こうしたUターンIターンのメカニズムを明らかにするために、住民基本台帳の個票に遡った分析、下北山中学校卒業業者名簿及び各種公的統計の分析を行いました。

その結果、転入してきた子有世帯（母子世帯含む）の半数が3年以内に



Fig.9 下北山村インタビューの様子

転出しており、親が子どもの小学校卒業を機に家族ぐるみで都市部へ移動する傾向があることがわかりました。下北山村もまた近畿2府5県の市町村の中で住民の平均所得がほぼ最下位にあり、仕事と教育の魅力を高めること、とくに地域における小さな経済循環と生きがいの創出が重要です。そこでワークショップを行い、ニーズの掘り起こしと課題の「見える化」を行いました。



Fig.10 下北山村での資料調査



奈良県内諸地域の歴史史料の調査・分析を行い、各地域を基盤に活動していた人びとの知的実践、県内／県外との交流を考察しています。

## グループⅡ

# 奈良の郷土知ネットワークの再評価事業

### 澤田四郎作旧蔵史料の撮影・調査・公開

澤田四郎作（1899-1971）は、奈良県香芝五位堂の造り酒屋（現在の澤田酒造）に生まれ、後に大阪玉出で医院を開業する小児科医ですが、同時に、早くから民俗研究に没頭し、大阪では数々の趣味人たちと交流した文化人でもありました。澤田の旧蔵史料は、現在、大阪大谷大学図書館澤田文庫、遠野市立博物館、そして澤田家（兵庫県宝塚市）にあります。なら学研究センターでは訪問調査をおこない、撮影ののち、研究パンフレットを作成しました。澤田旧蔵史料から見てくるのは、澤田個人の営みにとどまらない、関西趣味人の交流や日常のレベルでおこなわれていた民俗研究

交流の、多彩なありようです。

パンフレットは奈良女子大学

学術情報センターリポジトリで公開していますが、このほかにも澤田四郎作関連資料の翻刻紹介を『なら学研究報告』誌上で行っています。いずれも本学リポジトリよりダウンロード可能ですので、ご覧ください。

### 谷彌兵衛旧蔵史料の撮影・調査・公開

2021年8月、吉野林業史の研究者である谷彌兵衛氏（1934-）より所蔵史料を寄贈いただいた。吉野地域の林業に関する原文



Fig 1：宝塚澤田家にて。2016年7月25日の訪問調査のようす。澤田四郎作著作の稿本類が充実していました。

「知」の結節点で  
**澤田四郎作**  
人・郷土・学問



Fig 2：研究パンフレット表紙。年譜、地域、職分、交流、民俗学、研究といった観点から澤田四郎作の営為を紹介しています。

書のほか、ご自身の林業史研究で使用してきた書籍や複写資料群は、奈良県林業史研究の貴重な基礎資料となるものでしょう。

なら学研究センターでは原文書を撮影し、また書籍や資料類

の目録を作成し、研究のみならず教育にも役立ててもらおうべく、現在は学内限定で公開しています。



Fig 3：谷氏旧蔵の原文書。江戸後期における吉野林業の実態やパワーバランスなどがうかがえます。



Fig 4(左)・Fig 5(右)：作業風景。書籍や雑誌、文書などの撮影は、学生アルバイトの協力を得て行っています。資料にあわせて高さ等が調整可能な作業台は、本学職員の協力を得て作製しました。

### 山添村下浦家文書の撮影・調査

山添村は奈良市の東、奈良県の北東に位置する地域です。下浦家は代々、当該地域の中心的な役割を担ってきました。拝借した史料は近世から近代のものが中心で、往来物や教科書のほか、茶業組合規約や農会報など地域産業関連のパンフレット類があり、地域の中核を担ってきた家の蔵書として典型的なすがたを見せていますが、山添村の東側が名張（三重県）と接していることから名張の印刷所のチラシなども確認でき、奈良と三重の両県にかかわっている地域的特徴も下浦家の蔵書から見てとれます。

なら学研究センターでは、拝借史料の撮影を行いました。今後は『なら学研究報告』誌上での公開を目指しています。





Fig 6(左)・7(右): 下浦家文書より、『清書双紙』。子どもが手習いに使用していたもので、薄墨から始め、どんどん墨を濃くしていったり何度も使用する。残存稀少な歴史史料です。



Fig 8: 下浦家文書より、『誌上談話会』2号(1928年11月)。勝原村青年団作成頒布した謄写版の活動資料。活動報告のほか詩歌等の投稿も見られます。

### 花岡大学旧蔵史料調査・調査

花岡大学(1909-1988)は、奈良県吉野郡大淀町佐名伝に所在する浄迎寺の住職の次男として生まれた児童文学作家です。大淀高校教員を務めながら童話を多数創作する傍ら、吉野史談会を結成して郷土雑誌『吉野風土記』を刊行したりしています。



Fig 9: 浄迎寺門前。2022年6月訪問。

花岡大学旧蔵書の多くは現在、龍谷大学深草図書館花岡文庫に納められていますが、なら学研究センターでは大淀町教育委員会と協力して浄迎寺が所蔵する花岡大学旧蔵雑誌や花岡大学宛書簡類を調査しました。全国各地から童話同人雑誌が送られてきているほか、前登志夫や司馬遼太郎、住井すゑからの書簡も多く残されており、花岡大学の文芸交流のありようの具体像が見てとれる好個の史料群です。

撮影終了後は、『なら学研究報告』誌上での資料紹介を目指します。



Fig 10(左)・11(右): 浄迎寺調査風景。2022年7月・9月に再訪問し、雑誌や書簡類をお借りしてきました。

### 前登志夫旧蔵史料調査・調査・公開

前登志夫(1926-2008)は、奈良県吉野郡下市町広橋に生まれました。吉野で林業を営みつつ、その吉野の自然と向きあう自己を詠風として確立していったと評される詩人・歌人です。前の旧蔵書や書簡類は現在も前家に残されていますが、なら学研究センターでは前家に訪問して旧蔵史料の調査を行い、史料の一部をお借りすることができ



Fig 12: 2022年10月15日訪問。廃校になった広橋小学校の旧校舎には、この地域で生まれ育った詩人/歌人である前登志夫の著作を集めた前登志夫研究室が設置されており、前の短歌を通して子供たちが歌と接することができる場となっている

ました。拝借したのは前の短歌ノートで、発想から推敲、完成までを辿ることができる貴重な史料です。撮影ののちに『なら学研究報告』誌上での公開を目指しますが、前自身の書き入れがある『前登志夫著作年譜』については同誌で資料紹介を行い、本学リポジトリよりダウンロード可能になっています。ご覧ください。



Fig 13(左)・14(右): 前登志夫宅門前と書斎の風景。生前のまま残されていました。



Fig 15: 拝借した資料。前登志夫の短歌創作における発想や推敲のノートで、生成過程が追跡できる貴重な資料です。

### その他

なら学研究センターでは、上記のほか、生駒で刊行された地域雑誌の撮影もしているほか、今後は奈良市田原地区の青年団が主体となって発行していた地域新聞の調査にも入る予定です。地域と人とのつながり、他地域や人びととのつながりをおして奈良を立体的に捉えるべく、地域との連携に基づいて史料調査を実施しています。また、その史料は撮影をおしてデジタル保存するとともに、研究・教育に活用できるように積極的に公開しています。これは、原史料の保存と未来への継承をも念頭に置いた活動です。

国内外の第一線で活躍する研究者の協力を得て、講演会・研究会・シンポジウム、講座等を開催し、その研究成果をベースに、報告集の刊行やデータベースの公開などさまざまな活動を展開しています。

## センターの活動

### 1. 教育的・社会的活動

本センターでは、研究成果やスタッフの活動を学内外に、教育（授業）や社会活動（研究会の公開や研究成果を一般誌に連載など）を行っています。また 2022 年度からは、企業・地域・大学が「学び合う」ことによって教育・研究・地域貢献・産業支援を総合的に実施する産地学官連携プラットフォームのモデル「奈良型エクステンション」を、吉野郡の下市町、東吉野村、下北山村の 3 町村で試行開始している、大和・紀伊半島学研究所の活動を積極的に支えています。

#### 教育的活動

なら学  
なら学+

#### 社会的活動

雑誌『月刊大和路ならら』にて「続・続大学的奈良ガイド」を連載  
奈良型エクステンション（東吉野、下市、下北山）

### 2. 他機関との連携

本センターの活動は、「なら」を実質的／象徴的な共通基盤として、教育・研究・地域貢献が不可分に結びついている点が稀有な特徴です。したがって他機関との連携も自治体、企業、県内大学、地域づくり NPO など官民の差なく連携が生まれ、そこには教育・研究・地域課題解決支援の要素が、程度の差こそあれ、すべて含まれた総合的な連携となっています。また、市町村の学芸員や地域づくりコンサルタント企業の職員などを協力研究員として迎えていて、センター内部での相互サポート、相互コンサルティングが可能となっています。

#### 自治体との連携

奈良県地域振興部	王寺町	大淀町	下市町
下北山村	十津川村	東吉野村	
奈良県社会福祉協議会	高取町社会福祉協議会		



#### 県内他大学との連携

奈良県立大学	奈良大学	天理大学（主に研究会、シンポジウムでの協力）
--------	------	------------------------

#### 民間企業との連携

株式会社リングロー	中川政七商店	一般社団法人 TOMOSU
合同会社東吉野オフィスキャンプ	木工舎 ichi	株式会社リヴァ 他

#### 共同研究

- ・ 2022( 令和 4) 年度 地域住民のサポート・ネットワーク構築に向けたコミュニティ・リサーチ (代表：水垣源太郎)
- ・ 2022( 令和 4) 年度 下北山村におけるソーシャル・サポート・ネットワーク構築に向けたコミュニティ・リサーチ (代表：水垣源太郎)
- ・ 2021( 令和 3) 年度 高取町におけるコミュニティ主導の支えあいネットワーク構築 (代表：水垣源太郎)
- ・ 2021( 令和 3) 年度 下北山村における「関係人口」の創出・定着要因に関する社会人口調査 (代表：水垣源太郎)
- ・ 2020( 令和 2) 年度 奈良県南部東部地域の集落構造分析と社会地図化 (代表：水垣源太郎)
- ・ 2019( 令和元 ) 年度 奈良県南部におけるコミュニティ開発の拠点形成と人材蓄積過程 (代表：水垣源太郎)



### 3. なら学研究会

なら学研究センターでは、文学部なら学プロジェクト時代からの研究会を引き継ぎ、「なら学研究会」という名称で研究会も続けています。公開講座と異なり、専門的な話題と議論を重視して「半公開」といった感じですが、自治体職員、学芸員、近現代奈良の郷土史に興味のある方などが参加されています。なら学研究会では、近現代の奈良について調査や研究を行った在野の人々、また奈良の文化活動に深く関わった人物を回顧・再評価したり、それらの人々のつながりを明らかにすることを主なテーマにしています。なら学は大和中に広がっていた知のネットワークに再び光をあてる作業だと思っています。以下は2018年、なら学センターに移行して以後の研究会の記録です。

- ・2022年11月13日(日) 第35回「幕末の奈良まちに生まれた奇豪：宇宙庵 吉村長慶」  
講師：安達 正興氏(奈良研究者・著述家)、聞き手：寺岡 伸悟(奈良女子大学なら学研究センター長)  
場所：オンライン
- ・2022年9月11日(日) 第34回「吉野の山村と私の研究 -- 十津川村を中心に」  
講師：岡橋 秀典氏(奈良大学教授・人文地理学)  
場所：オンライン
- ・2022年3月14日(月) 第33回「下北山村を知る」  
講師：巽 正文氏(元・下北山村歴史民俗資料館長)  
場所：下北山村、下市町、オンラインのハイブリッド
- ・2021年10月14日(木) 第32回「生駒新聞の時代 -- 山崎清吉と西本喜一」  
講師：吉田 伊佐夫氏(元産経新聞記者)・小島亮(中部大学人文学部教授・歴史学)  
場所：オンライン
- ・2021年2月20日(日) 第31回「いかにして〈なら学文献〉を料理するか：研究アプローチと課題」  
講師：磯部 敦氏(なら学研究センター)  
場所：オンライン
- ・2020年10月25日(日) 第30回「近世奈良町木辻遊廓の歩み」  
講師：井岡 康時氏(奈良大学教授・歴史学)  
場所：オンライン
- ・2020年8月23日(日) 第29回「春日神鹿保護会の記録・組織・活動 -- 鹿の保護活動とその当事者たちの分析」  
講師：東城 義則氏(立命館大学客員研究員・民俗学)  
場所：オンライン
- ・2020年2月23日(日) 第28回「私が関わった最近の吉野研究点描 -- 吉野宮・龍門騒動・群小猿楽座」  
講師：池田 淳氏(吉野歴史資料館館長)  
場所：奈良女子大学 N339 教室
- ・2020年1月26日(日) 第27回「藤影堂・大和史跡研究会・藤田家」  
講師：桂 美奈子氏(藤影堂管理者)  
場所：藤影堂・奈良市不審ヶ辻子
- ・2019年6月16日(日) 第26回「田原でなら学 -- 田原青年層の地域活動と昭和期青年団資料」  
講師：西久保 繁己氏(元奈良市図書館長・田原公民館主任)  
場所：奈良市田原公民館 講座室
- ・2019年2月24日(日) 第25回「奈良県東部方言の現在」  
講師：中井 精一氏(富山大学人文学部教授・方言学)  
場所：奈良女子大学 N339 教室
- ・2018年12月23日(日) 第24回「折口信夫の大和(続) -- 笹谷良造も含めて」  
講師：西村 博美氏(詩人・奈良民俗文化研究所研究員)  
場所：奈良女子大学 N339 教室
- ・2018年10月21日(日) 第23回「折口信夫の大和」  
講師：西村 博美氏(詩人・奈良民俗文化研究所研究員)  
場所：奈良女子大学 N339 教室
- ・2018年8月19日(日) 第22回「前登志夫について」  
講師：喜多 隆子氏(歌人)  
場所：奈良女子大学 N339 教室
- ・2018年6月17日(日) 第21回「奈良 文学の小窓からの風景」  
講師：浅田 隆氏(奈良大学名誉教授・近代文学)  
場所：奈良女子大学 N339 教室
- ・2018年2月24日(土) 第20回「保井芳太郎について」  
講師：岡島 永昌氏(王寺町文化資源活用係長・なら学研究センター)  
場所：奈良女子大学 N339 教室



## 4. シンポジウムの開催

- 2022年1月11日 十津川村×大和・紀伊半島学研究所 連携シンポジウム  
「十津川村再発見一村史（地理・自然編）発刊によせて」
- 2021年8月18日 国際シンポジウム 「21世紀におけるコミュニティ、福祉、社会技術」
- 2021年3月22日 シンポジウム 「地域で考える社会課題解決のデザイン」（第2回）



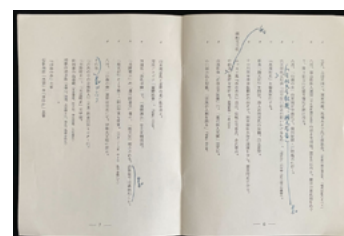
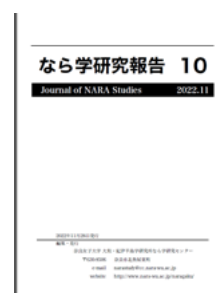
## 5. 出版物

### 『なら学研究報告』

センターの紀要的役割を果たしています。完全電子ジャーナルで、本学の学術情報センターリポジトリにて公開しています。2019年5月に創刊号が出されてから、すでに10号となっています。

以下はそのタイトルと執筆者一覧です。

- ・ 10号（2022年11月）【資料紹介】横田俊一宛前登志夫書簡十四通  
磯部 敦、佐藤 さくら、加治屋 初弥、西谷 明日花、猫本 明花
- ・ 9号（2022年11月）【資料紹介】『前登志夫著作略年譜』（前登志夫自筆書き入れ）  
磯部 敦、寺岡 伸悟
- ・ 8号（2021年9月）【資料紹介】戦後奈良の文芸同人雑誌『オルフォイス』『飛鳥』  
附 奈良県立桜井高等学校短歌部『大和恋』  
磯部 敦、小川 菜緒
- ・ 7号（2021年9月）【資料紹介】戦後奈良の文芸同人雑誌『望郷』『詩豹』  
附 旧蔵者横田俊一の略歴と執筆文献一覧  
磯部 敦、加治屋 初弥、佐藤 さくら、中村 栄理子、三浦 実加
- ・ 6号（2021年6月）宝塚澤田家所蔵澤田四郎作史料目録  
磯部 敦、岩坂 七雄、樽井 由紀、寺岡 伸悟、山上 豊
- ・ 5号（2020年12月）翻刻 澤田四郎作『日誌』（大正十五年十月～昭和二年四月）  
磯部 敦、三浦 実加
- ・ 4号（2020年9月）近代奈良県書物文化環境一覧  
磯部 敦
- ・ 3号（2020年8月）翻刻 澤田四郎作『日誌』（昭和九年分）  
磯部 敦、三浦 実加
- ・ 2号（2020年3月）奈良女子高等師範学校報国会図書 -- 文学部図書室残存分の目録と紹介  
磯部 敦、片島 空、古石 春佳、河野 真邑、坂本 真莉子、佐藤 さくら、  
中村 栄理子、西谷 明日花、宮永 莉帆、室山 知空、山崎 紫野、涌嶋 美月
- ・ 1号（2019年5月）翻刻 澤田四郎作『日誌』（昭和八年分）  
磯部 敦、汪 少二（雨冠+文）、小泉 紀乃



### 協力研究者ほかの著作・報告書

- ・ 大和・紀伊半島学研究所 共同研究報告書（2022年3月）  
『吉野・熊野地域における近代アーカイブの収集と検討（1）：岸田日出男アーカイブと関連資料の評価』  
松田 度、岡島 永昌
- ・ 令和2年度 奈良女子大学大和・紀伊半島学研究所 一般共同研究助成金報告書（2021年3月）  
『奈良盆地におけるノガミ行事に関する研究 -- その1--』  
樽井 由紀
- ・ 十津川村教育委員会編（2021年）  
『十津川村史（地理・自然編）』  
寺岡 伸悟、西村 雄一郎、浅田 晴久、室崎 千重
- ・ 奈良女子大学文学部なら学研究会（2017年）  
『知の結節点で 澤田四郎作 人・郷土・学問』

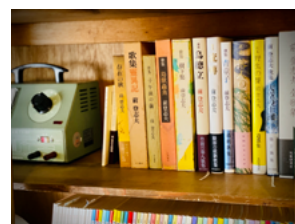


## 『月刊大和路ならら』への「なら学」研究成果の一般公開

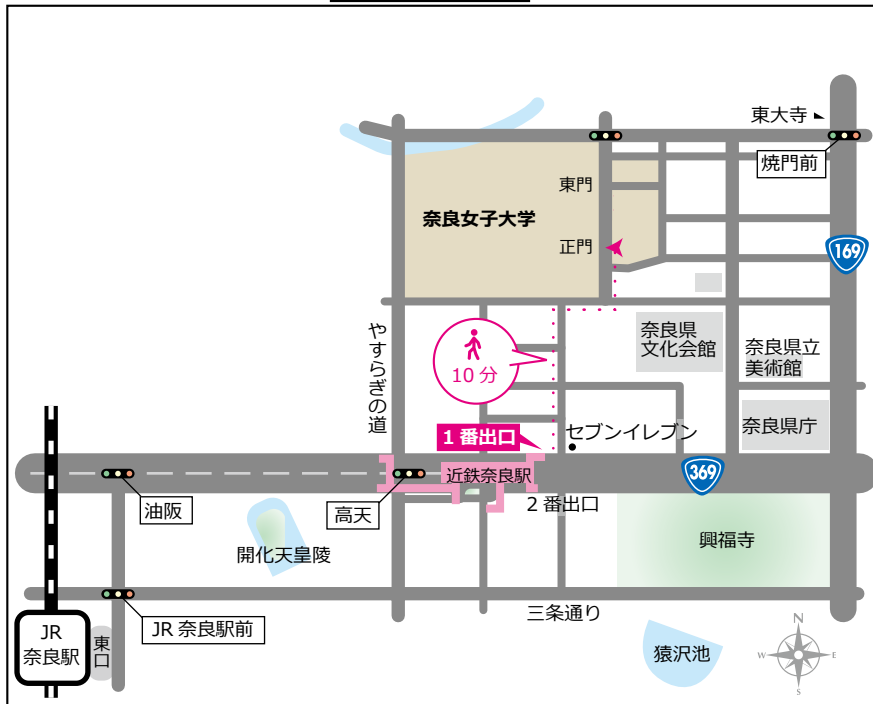
奈良県で発行される民間の地域文化誌として評価の高い『月刊大和路ならら』にて、文学部なら学プロジェクト時代から、「なら学」の研究成果を、一般向けによりわかりやすく公開するために、センター員を中心に連載を続けています。当該雑誌は、北海道から九州まで全国に読者を有しており、本センターの研究状況やセンター員の活動紹介に役立っています。また、これらのなかから選択した論考をリライトして、『続・大学的奈良ガイド』（昭和堂）を2020年に出版しました（編者は、文学部なら学プロジェクト）。

以下に、センター発足以降の、『月刊大和路ならら』連載「続・続大学的奈良ガイド」のタイトルと執筆者一覧をまとめました（2018年度以降分）。

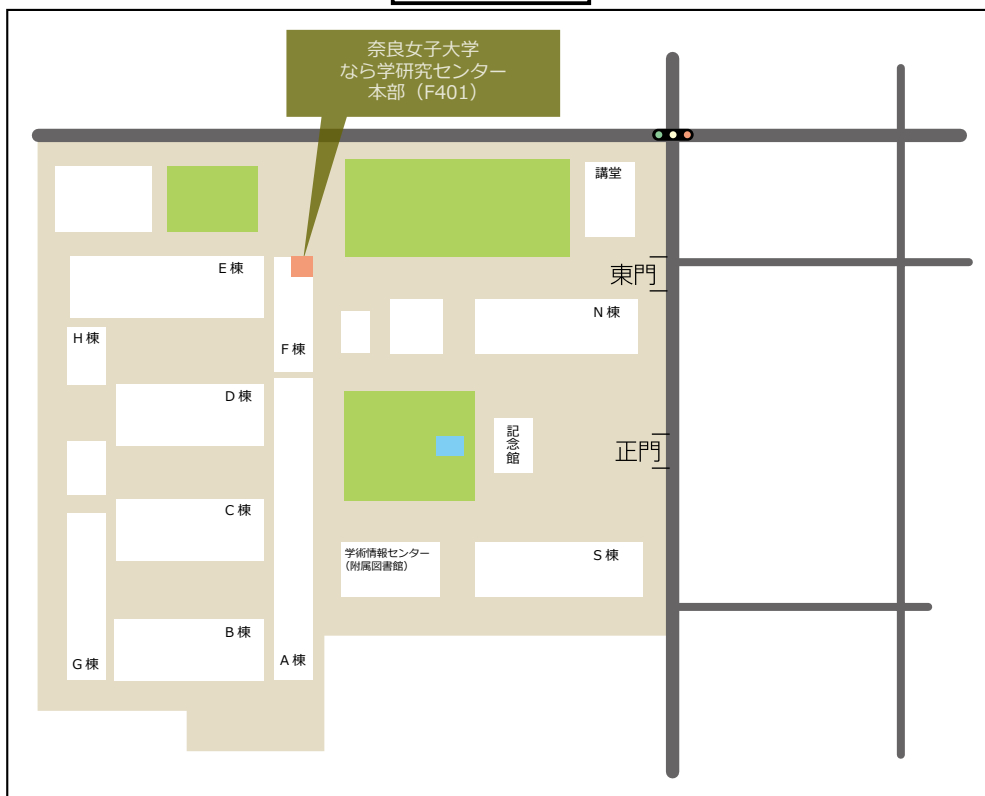
- ・第86講 2022年12月号 「宗教空間の連続性から丹生川上神社を考える」 齊藤 恵美
- ・第85講 2022年11月号 「上代びとの漢字学習 -- まずは千字文から」 奥村 和美
- ・第84講 2022年10月号 「三奇楼 -- 吉野町のコワーキング」 寺岡 伸悟
- ・第83講 2022年9月号 「ラストエンペラーの奈良訪問」 矢島 洋一
- ・第82講 2022年8月号 「聖徳太子と毘沙門天 -- 東アジアにおける毘沙門天信仰との関わり」 佐藤 有希子
- ・第81講 2022年7月号 「環濠集落の今昔」 宮崎 良美
- ・第80講 2022年6月号 「『続・大学的奈良ガイド』刊行に寄せて -- 「ならら」の連載が本になりました」  
寺岡 伸悟、小川 伸彦
- ・第79講 2022年5月号 「最先端気候史データと日本古代史」 西谷地 晴美
- ・第78講 2022年4月号 「奈良のコワーキングスペース -- 新たな奈良ライフの入口」 寺岡 伸悟
- ・第77講 2022年3月号 「女高師時代の教材・玩具 -- “おもちゃのチャチャチャ” よりずっと前から」 宮路 淳子
- ・第76講 2022年2月号 「米山俊直の大和」 寺岡 伸悟
- ・第75講 2022年1月号 「薬師寺の龍王社」 穴戸 香美
- ・第74講 2021年12月号 「花岡大学のレガシーを語り継ぐ」 松田 度
- ・第73講 2021年10月号 「歴史の記憶／記憶の歴史 -- 飛鳥豊浦寺跡界限」 小川 伸彦
- ・第72講 2021年9月号 「王寺の松浦組隧道探訪紀行」 岡島 永昌
- ・第71講 2021年8月号 「次世代につながる明日香村の茅葺屋根」 室崎 千重
- ・第70講 2021年6月号 「運ぶラクダ、運ばれるラクダ」 矢島 洋一
- ・第69講 2021年6月号 「十津川村の『自然』と風景の50年」 西村 雄一郎
- ・第68講 2021年3月号 「景観に見る奈良の風」 浅田 晴久
- ・第67講 2021年2月号 「奈良女子大学の大和・紀伊半島学研究所東吉野分室」 田中 亜季
- ・第66講 2021年1月号 「生活空間における木材・吉野材の魅力」 藤平 眞紀子
- ・第65講 2020年12月号 「本を愛した吉野の実業家・阪本猷」 吉川 仁子
- ・第64講 2020年11月号 「澤田四郎作の周辺 -- 医学博士、「邪宮淫祠の研究に浮身」をやつす」 磯部 敦
- ・第63講 2020年9月号 「奈良公園と伝統行事 -- 近代の新能再興をめぐる」 岩坂 七雄
- ・第62講 2020年8月号 「疫鬼退散祈願と毘沙門天」 佐藤 有希子
- ・第61講 2020年7月号 「七夕と索餅」 前川 佳代
- ・第60講 2020年6月号 「近代の温泉と十津川村の温泉」 樽井 由紀
- ・第59講 2020年5月号 「鉄道の黎明を支えた隧道請負・松浦組」 岡島 永昌
- ・第58講 2020年4月号 「岸田日出男のエコロジー」 松田 度
- ・第57講 2020年3月号 「志賀直哉と純文学の精神」 田中 希生
- ・第56講 2020年2月号 「天皇の坐す宮 -- 古代「天下」考」 河上 麻由子
- ・第55講 2019年8月号 「植物の鹿対策 -- 奈良公園イラクサ考」 佐藤 宏明
- ・第54講 2019年7月号 「起点は下市と上市 -- 吉野郡の熊野街道」 西谷地 晴美
- ・第53講 2019年6月号 「地域内経済循環を創る -- 川上村における地域づくりの取り組み」 青木 美沙
- ・第52講 2019年5月号 「よみがえる山あいの村 -- 十津川村・谷瀬集落再生プロジェクト」 室崎 千重
- ・第51講 2019年2月号 「宇多上皇、吉野宮滝へ -- 道真の「御幸記」を繙く」 西村 さとみ
- ・第50講 2019年1月号 「魂よ、海に還れ -- 折口信夫と他界観」 田中 希生
- ・第49講 2018年12月号 「体験としての『大和古寺風物誌』」 磯部 敦
- ・第48講 2018年11月号 「澤田四郎作を知っていますか」 寺岡 伸悟
- ・第47講 2018年9月号 「奈良が「国のまほろば」になった理由と時」 小路田 泰直
- ・第46講 2018年8月号 「志賀直哉『犬』 -- 炎天下、奈良の町で飼犬を探す」 吉川 仁子
- ・第45講 2018年7月号 「秘仏へのまなざし -- 東大寺蓮乗院寅清と『覚禅鈔』」 森 由紀恵
- ・第44講 2018年5月号 「遷都と都の住民 -- 『続日本紀』にみる人々の動きと暮らし」 穴戸 香美
- ・第43講 2018年4月号 「椎岡廟と佐保殿 -- 不比等がみつめる奈良女子大学」 前川 佳代



## 大学周辺図



## 大学構内図



発行 奈良女子大学 大和・紀伊半島学研究所 なら学研究センター  
 編集 狩俣 順也 寺岡 伸悟 水垣 源太郎 磯部 敦

《センター本部》

〒 630-8506 奈良市北魚屋西町 F401 室

HP : <http://www.nara-wu.ac.jp/naragaku/>

E-mail : [narastudy@cc.nara-wu.ac.jp](mailto:narastudy@cc.nara-wu.ac.jp)